Japan Society of Obstetrics and Gynecology



## P－426 当科におけるVBAC（Vaginal birth after cesarean delivery）の成績

福島県立医大
石田友彦、藤森敬也、山田純也、安斎憲、三瓶稔、本田信也、高梨子篤浩、鈴木庸介、鈴木りか、大川敏昭、柳田薫、佐藤章

【目的】
近年、周産期管理の進歩に伴い、帝王切開率はわが国のみならず世界的にも増加の傾向にある。そこで、帝王切開率減少のため、前回帝王切開症例の反復帝切が再検討され、前回帝切後経腟分娩（Vaginal birth after cesarean delivery；VBAC）が見直されるようになった。そこで今回我々は当科における過去12年間の既往帝切症例を統計学的に検討したので報告する。
【対象】
1986年から1997年までの12年間の当科における総分娩数5455例を検討した。
【成績】
総分娩数 5455例中、帝王切開例 1276例（23.4%）帝王切開既往妊娠例 659例（12.1%）このうち試験分娩（Trial of labor；TOL）を行ったものは292例（44.3%）VBAC成功例 226例（VBAC率34.3%、VBAC成功率 77.4%）選択的反復帝王切開 367例（55.7%）であった。前回帝切の適応別のVBAC成功率では、難産（児頭骨盤不均衡または分娩停止）で62.5%、骨盤位妊娠で89.6%、胎児仮死で71.4%、前置胎盤などで86.9%であった。母体死亡、周産期死亡はともに見られなかった。TOLのうち子宮破裂は１例（0.4%）のみで、諸家の報告と変わりなかった。
【結論】
当科でのVBACの成功率は77.4%で諸家の報告とほぼ同様のものであった。VBACの適応を充分に検討し、分娩時の迅速な対応が可能ならば、TOLは妊婦にとって有益な分娩様式と思われた。

## P－427 リンパ球性下垂体炎合併妊娠の1例

虎の門病院
小竹譲，田中千晶，浅井智子，坂本公彦，塩田恭子
古屋智，高橋敬一，横尾郁子，宮川智幸，伊豆田誠人
佐藤孝道

リンパ球性下垂体炎は、妊娠中あるいは産褥期に発症することがある下垂体の自己免疫疾患である。その頻度は非常にまれで、現在まで世界で44例の合併妊娠が報告されているだけである。今回我々は、妊娠25週に視野障害で発症し、ステロイド治療が著効し、生児を得たリンパ球性下垂体炎合併妊娠の1例を経験したので報告する。
症例は２回経妊、０回経産婦。6年間の不妊を主訴に当科を受診し、抗精子抗体が陽性であった。３回目の体外受精にて妊娠。妊娠初期の経過には特に異常はなかった。妊娠25週、目が見えにくいとの訴えがあり、眼科にて球後視神経炎と診断されステロイドが投与された。しかし妊娠31週、両耳側半盲が出現し、頭部MRIを施行した。下垂体上部に約1.5cmの山型の腫瘤が認められ、視神経を圧迫していた。鑑別疾患の一つであるプロラクチン産生腫瘍は妊娠前PRL値：7.0ng/ml、34週にて4.4ng/mlと、否定的であった。free-T3 、cortisol、ADHの基礎値の低下やCRH負荷試験にてACTHの低下、cortisolの低反応また、TRH負荷試験ではTSH、PRLの低反応がみられ汎下垂体機能低下があると考えられた。病理学的な根拠は得られていないが、典型的な画像と内分泌的根拠からリンパ球性下垂体炎と診断した。35週PSL40mg/日、チラジンの投与を開始した。38週にて視野障害は消失し、腫瘤の著明な縮小が観察された。38週５日微弱陣痛のためオキシトシンを使用したが、3016gの女児を正常分娩。乳汁分泌は不良であった。リンパ球性下垂体炎は放置されると副腎機能不全にて死亡することもあり、稀ではあるが妊娠中の視野障害の原因として考慮すべき疾患の一つであると考えられた。

NII-Electronic Library Service